

日本学術会議中部地区会議ニュース

No. 160

2026. 10

I. 令和 8 年度第 1 回日本学術会議中部地区会議運営協議会

信州大学松本キャンパス本部管理棟 5 階第一会議室及びオンライン会議

II. 令和 8 年度日本学術会議中部地区会議

学術講演会「現実への三つの眼差し

－自然科学・社会科学・人文科学の世界理解をめぐる対話－

信州大学松本キャンパス附属図書館・中央図書館 2 階セミナー室及びオンライン開催

「世界は一つに決まるのか

－物理と情報から考える現実と選択－

藤田 あき美（信州大学工学部 准教授）

「中山間地域における新たなマネジメントの可能性

－ひと・環境・いとなみから地域の在り方を考える－

関 利恵子（信州大学経法学部 教授）

「仏教から見た人間の現存在と社会」

吉水 千鶴子（日本学術会議第一部会員、筑波大学人文社会系 名誉教授、公益財団法人東洋文庫研究部 研究員）

III. 日本学術会議会員・連携会員コーナー

「熟練作業の自動化に向けたロボット設計の考え方と、

みかん自動収穫への展開

～「熟練を再現する」から「作業を簡単にする」へ～

池浦 良淳（三重大学大学院工学研究科 教授）

IV. 日本学術会議中部地区科学者懇談会コーナー

「日本学術会議第 196 回総会傍聴記」

保柳 康一（科学者懇談会長野県幹事・信州大学 名誉教授）

V. 中部地区科学者懇談会新規会員について

I. 令和8年度第1回日本学術会議 中部地区会議運営協議会

議事録は以下のとおりです。

開催日時 令和8年7月10日(金)
10:30~11:55
開催場所 信州大学松本キャンパス本部管理棟
5階第一会議室及びZoomによるオン
ライン会議 (ハイブリッド開催)

出席者 ※ オンライン参加

【日本学術会議中部地区会議運営協議会委員】

高田 広 章 (中部地区会議代表幹事
名古屋大学
未来社会創造機構教授)
護 山 真 也 (信州大学人文学部教授)
※久木田 直 江 (静岡大学名誉教授)
※野 口 晃 弘 (南山大学経営学部経営学科教授)
※大 藪 千 穂 (岐阜大学教育学部教授/副学
長/機構長補佐)
※後 藤 英 仁 (三重大学医学部医学科教授)
※張 勁 (富山大学副学長/学術研究部理
学系教授)
永 井 由佳里 (北陸先端科学技術大学院大学理
事/副学長)
※西 弘 嗣 (福井県立大学恐竜研究所所長)
※石 原 一 彰 (名古屋大学大学院工学研究科教
授)

【日本学術会議中部地区科学者懇談会各県幹事】

松 田 正 久 (科学者懇談会幹事長 愛知教育
大学名誉教授・元学長)
竹 内 章 (富山大学名誉教授)
※高 橋 満 彦 (富山大学教育学部教授)
福 森 義 宏 (金沢大学名誉教授)
山 川 修 (福井県立大学名誉教授)
※永 井 二 郎 (福井大学学術研究院工学系部門
教授)
奥 村 幸 久 (信州大学学術研究院工学系教授)
保 柳 康 一 (信州大学名誉教授)
仲 澤 和 馬 (岐阜大学名誉教授)
※山 本 公 徳 (岐阜大学地域科学部教授)
鈴 木 滋 彦 (静岡県立農林環境専門職大学・
元学長)
※塩 尻 信 義 (静岡大学理事・副学長)
和 田 肇 (名古屋大学名誉教授)
※東 村 博 子 (名古屋大学名誉教授)

吉 岡 基 (三重大学名誉教授)
※瀬 戸 美奈子 (三重大学教育学部教授)

【日本学術会議】

磯 博 康 (日本学術会議副会長)
※田 中 駒 子 (日本学術会議事務局次長)
大 島 恵 子 (日本学術会議事務局企画課課長
補佐(広報担当))
中 島 和 (日本学術会議事務局企画課広報
係長)

【陪 席】

北 見 央 (信州大学総務部総務課長)
犬 浦 恭 子 (信州大学総務部総務課副課長)
藤 井 康 聡 (三重大学研究・地域連携部研
究推進チーム課長)
山 本 良 治 (三重大学研究・地域連携部研究
推進チーム副課長)
佐 野 智 之 (三重大学研究・地域連携部研究
推進チーム係長)
林 紀 英 (名古屋大学研究協力部長)
浅 田 進 矢 (名古屋大学研究協力部次長)
水 野 克 彦 (名古屋大学研究協力部研究企画
課課長補佐)
佐 藤 孝 政 (名古屋大学研究協力部研究企画
課研究総務係長)

議 事

1 中部地区会議運営協議会について

高田代表幹事から開会の挨拶の後、資料1に基づき、出席者から所属している部や専門分野等について自己紹介があった。次いで、本日の中部地区会議運営協議会は、科学者懇談会と同時開催したいとの提案があり、これを了承した。

続けて、資料2-1~2-3に基づき、運営協議会委員名簿、日本学術会議地区会議運営要綱等を確認した。

2 地区会議代表幹事の報告

高田代表幹事から、4月9日~10日に開催された第196回総会について報告があり、詳細は後刻の「各県幹事との打合せ会」で、科学者懇談会長野県幹事の保柳先生から、総会傍聴記について報告いただくこととしている旨説明があった。

次いで、高田代表幹事から、資料3-1~3-3に基づき、中部地区会議の会員、連携会員数の状況について報告があった。

3 学術講演会について

高田代表幹事から、後刻の「各県幹事との打合せ会」で、学術講演会の進め方等について審議願いたい旨説明があった。

4 地区会議ニュースについて

高田代表幹事から、資料 4-1~4-3 に基づき、次号 (No.160) 発行のための原稿執筆者について、前回までの運営協議会で承認いただいたルールに基づいて、以下のとおり依頼したい旨提案があり、意見交換及び審議の結果、運営協議会としてこれを了承した。

○会員・連携会員コーナー：

三重県連携会員の後藤英仁先生（三重大学医学部教授）から同会員の池浦良淳先生（三重大学大学院工学研究科教授）又は西村訓弘先生（三重大学大学院地域イノベーション学研究科教授）へ依頼等調整し、人選については三重県連携会員間で検討いただくこととした。

○科学者懇談会コーナー（日本学術会議総会傍聴記）：

三重県幹事の瀬戸美奈子先生（三重大学教育学部教授）又は柿沼誠先生（三重大学大学院生物資源学研究科教授）にご執筆の人選いただきたいところ、検討の結果、三重県幹事の瀬戸美奈子先生にご執筆いただくこととした。

なお、次々号 (No.161) で、総会傍聴記を執筆いただくため、三重県幹事の瀬戸美奈子先生に、令和 8 年 10 月 1~3 日に開催予定の第 197 回日本学術会議総会にご出席いただきたい旨説明があった。

また、現地出席の場合、旅費は科学者懇談会から支出する旨の説明があった。

5 令和 7 年度中部地区会議事業実施報告について

高田代表幹事から、昨年度の中部地区会議事業実施報告について説明いただきたい旨発言があり、浅田名古屋大学研究協力部次長から、資料 5 に基づき、中部地区会議の令和 7 年度の事業実施報告について説明があった。

6 次回地区会議の開催について

高田代表幹事から、資料 6 に基づき、次回地区会議の開催について、持ち回り順により三重県に依頼したい旨説明があった。なお、開催時期については、当番校で調整した結果、令和 8 年 12 月 23 日（水）を予定している旨案内があった。また、令和 9 年度

の地区会議開催持ち回り順として、春は福井県、秋は静岡県が担当することを決定した。

7 令和 8 年度中部地区会議事業実施計画について

高田代表幹事から、来年度の中部地区会議事業実施計画について説明いただきたい旨発言があり、浅田名古屋大学研究協力部次長から、資料 6 に基づき、中部地区会議の令和 8 年度の事業実施計画について説明があった。

8 科学者懇談会各県幹事との打合せ会

松田幹事長から挨拶の後、資料 7-1~7-2 に基づき、幹事一覧及び規約についての報告があった。次いで、松田幹事長から、以下の事項について説明があった。

○科学者懇談会の新会員の加入について

資料 8-1~8-2 に基づき、新会員の加入について提案があり、審議の結果、これを了承した。

○科学者懇談会の県幹事の交代について

資料 9-1~9-2 に基づき、幹事の交代について提案があり、三重県幹事の交代について審議の結果、これを了承した。

○令和 7 年度科学者懇談会収支について

松田幹事長から、昨年度の科学者懇談会収支について説明いただきたい旨発言があり、浅田名古屋大学研究協力部次長から、資料 10 に基づき、令和 7 年度科学者懇談会収支について報告があった。

○日本学術会議の第 196 回総会の報告について

松田幹事長から、日本学術会議第 196 回総会について報告いただきたい旨発言があり、保柳長野県幹事から、資料 11 に基づき、4 月 9 日~10 日に開催された第 196 回総会について報告があり、この後の学術講演会でも報告予定である旨、説明があった。

また、令和 8 年秋に開催される日本学術会議総会には、三重県幹事の先生に傍聴を依頼することとした。

○学術講演会の進め方について

資料 12-1~12-2 に基づき、この後の学術講演会は、先刻の運営協議会でも発言のあったとおり、対面とオンラインのハイブリッド形式で護山真也先生（中部地区会議運営協議会委員）の司会により開催する旨説明があった。

○その他

松田幹事長から、その他検討事項があれば提起いただきたい旨発言があり、前回議論のあった、博士課程人材等々、情報交換したい旨の提言があった。

これを受けて、出席各位からは、各大学における財政面・人材不足による、研究分野を超えたデータ収集の必要性や、大学院教育の重点化等に問題意識を持っていくことへの確認があった。

磯副会長から、日本学術会議における直近の動向等の補足説明があり、出席各位による活発な意見交換が行われた。

○令和8年度第1回日本学術会議中部地区会議学術講演会

「現実への三つの眼差し——自然科学・社会科学・人文科学の世界理解をめぐる対話」

開催日時 令和8年7月10日（金）

13:00～16:30

開催方法 対面（信州大学松本キャンパス附属図書館・中央図書館2階セミナー室）及びオンライン（Zoom）（ハイブリッド開催）

講演講師

・世界は一つに決まるのか——物理と情報から考える現実と選択

藤田 あき美（信州大学工学部准教授）

・中山間地域における新たなマネジメントの可能性—ひと・環境・いとなみから地域の在り方を考える—

関 利恵子（信州大学経法学部教授）

・仏教から見た人間の現存在と社会

吉水 千鶴子（日本学術会議第一部会員、筑波大学人文社会系名誉教授、公益財団法人東洋文庫研究部研究員）

学術講演会参加者 167名（対面47名、
オンライン120名）

以上

Ⅱ. 令和 8 年度

日本学術会議中部地区会議

学術講演会

「現実への三つの眼差しー自然科学・社会科学・人文科学の世界理解をめぐる対話ー」

開催日時 令和 8 年 7 月 10 日 (金)
13 : 00 ~ 16 : 30

開催場所 信州大学松本キャンパス附属図書館・
中央図書館 2 階セミナー室 (Zoom)
(ハイブリッド開催)

講 師

- 藤田 あき美 (信州大学工学部准教授)
「世界は一つに決まるのかー物理と情報から考える現実と選択」
- 関 利恵子 (信州大学経法学部教授)
「中山間地域における新たなマネジメントの可能性ーひと・環境・いとなみから地域の在り方を考えるー」
- 吉水 千鶴子 (日本学術会議第一部会員、筑波大学人文社会系名誉教授、公益財団法人東洋文庫研究部 研究員)
「仏教から見た人間の現存在と社会」

参 加 者 167 名
(※現地参加・オンライン参加の合計数)

《学術講演会要旨》

予測不可能性と不確かさが常態化する VUCA*の時代において、私たちは、単一の視点では捉えきれない複雑で多面的な現実といかに向き合うべきかを問われている。これまで自然科学・社会科学・人文科学は、それぞれ固有の問いと方法にもとづき、世界の異なる側面を解明してきた。しかし今日では、個

別の学問領域の垣根を越えた総合知の構築が求められている。

自然科学において、私たちの世界理解は本質的に「近似」や「仮説」に基づく。不完全であることを前提としたこの理解は、単なる限界ではなく、私たちの選択や創造を可能にし、さらには社会の意思決定とも深く結びついている。社会科学としての管理会計研究では、理論的考察とともに、山間部地域に固有のマネジメント課題と向き合うための方法を構築することが課題となっている。一方、人文科学のひとつである仏教学は、文献にもとづいて仏教の哲学的世界観を解明してきたが、仏教が社会に根ざした宗教である以上、その社会へのコミットメントも視野に入れ、社会学的アプローチも行われている。

本企画は、自然科学、社会科学、人文科学という性格の大きく異なる三分野をあえて並置し、それぞれの世界理解の対話を試みる。異なる方法論の背景にある共通の問題意識を共有することで、これからの学術研究における複眼的な現実理解の可能性を探りたい。

*VUCA=Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性) の頭文字を取った造語。将来の予測が困難な、激動の時代を表すキーワード。

世界は一つに決まるのか — 物理と情報から考える現実と選択 —

藤田 あき美
(信州大学工学部准教授)

● 物理法則で、未来を予測できるのはなぜか

1969 年、人類は、アポロ 11 号が地球を出発する前から、約 38 万キロメートル先の月面上の着陸予定地点と、そこに至る軌道を計算していた。現在では、火星探査機を地球から打ち上げ、約 7 か月後に、火星上の数キロメートル規模の着陸予定域へ着陸させることもできる。実際の軌道予測ではさまざまな要因を考慮するが、その基本は、ニュートンの運動法則と万有引力の法則を用いて、現在の状態から未来の状態を計算することである。なぜ、このような未来予測が可能なのだろうか。

物理世界を記述する基本方程式は、原則として、未来と過去を区別しない。¹ 例えば、空気も摩擦もない理想化された空間で運動するボールを考える。その運動だけを映像で見ても、順再生か逆再生かを区別できない。² また、現在の位置と速度が分かれば、運動法則によって、未来と過去の軌跡を同様に計算できる。このように、ある時点の完全な状態と物理法則から、過去と未来の状態が一意に定まる性質を決定論という。ニュートン力学は、この意味で決定論的である。本講演では、物理世界の根本的な時間発展も決定論的なものとして議論する。³

この決定論的な世界像を、相対性理論が記述する四次元時空として捉えたと、過去・現在・未来の出来事が一つの時空に配置された「ブロック宇宙」という見方に至る [3]。決定論によって一意に定まる宇宙の全歴史は、一つの四次元的な全体として実在し、未来もすでにその一部として存在している。物理法則が宇宙全体に適用されるなら、私たちの思考や選択も、宇宙の全歴史の一部としてすでに存在することになる。それでは、私たちの思考や選択を含む世界の展開は、本当にただ一通りに定まっているのだろうか。以下では、情報、計算、創発する知識をたどり、可能性空間と選択の問題へと議論を進める。

¹ 弱い相互作用では時間反転対称性の破れが観測されている [1]。ただし、これは摩擦や熱伝導などに現れる熱力学的な時間の向きとは異なる。

² 私たちが日常経験する時間の向きは、熱力学的な巨視的現象として現れるが、基本法則の決定論とは別の問題である [2]。

³ 量子論では、個々の観測結果を確率的に扱う解釈がある一方、宇宙全体の量子状態がシュレーディンガー方程式に従って決定論的に発展すると考える多世界解釈もある。本講演では、根本的な時間発展が決定論的であるという点で後者の立場を採る。

● 情報は物理系に実装される

物理学では、位置、速度、場などによって世界の状態を記述する。情報とは、可能な複数の状態のうち、どの状態にあるかを区別して表すものである [4]。また、情報は複製・変換でき、「別の状態もあり得た」という反事実的性質と、特定の物理媒体によらず実装できる媒体非依存性を持つ [5]。

写真、音楽、文字も情報である。デジタルコンピュータでは、これらはいずれも 0 と 1 の列として表現されている。0 と 1 は抽象的な記号だが、コンピュータの内部ではトランジスタ回路における電圧の高低などの物理状態として実装される。同じ情報は、電球の点滅やコインの表裏などの配列としても表現できる。このように、情報は異なる媒体に実装できる。

同時に、現実の宇宙では、情報は必ず何らかの物理系に実装される。コンピュータ内の情報はトランジスタの電気的状態として、遺伝情報は DNA の塩基配列として実装され、人の思考も脳内の神経活動などの物理過程として実現される。そして、情報に対する操作も物理系の状態変化である。とりわけ、温度 T の環境で 1 ビットの論理情報を消去するような論理的に不可逆な操作には、ランドアウアーの原理により、少なくとも $k_B T \ln 2$ の熱が環境へ散逸する [6]。⁴ 情報は抽象的に記述できるが、物理的な実装なしには存在できない。ここから「情報は物理である」という視点が得られる。

⁴ k_B はボルツマン定数である。

● 計算と原理的な予測不可能性

計算とは、情報として記述された現在の状態を、規則に従って次の状態へ変換することである。未来予測も、「現在の状態 + 物理法則 → 未来の状態」という計算にほかならない。情報が物理的に実装される以上、計算もまた、計算機や脳の状態が実際に変化する物理過程である。

チャーチ・チューリング・ドイチュの原理によれば、有限に実現可能な物理系は、有限の手段で動作する万能計算機によって完全にシミュレートできる [7]。この原理を宇宙全体に適用でき、その状態と法則を有限のアルゴリズムとして記述できるなら、宇宙全体も計算できるように思える。

ところが、任意のアルゴリズムが有限時間で停止して答えを出すかどうかを、必ず事前に判定する普遍的な方法は存在しない。これが停止問題であり、その証明は判定手続きをそれ自身に適用する自己参照から矛盾を導く [8]。万能計算機は物理系として宇宙内に実装できるため、この限界は、物理系の未来予測にも及ぶ。これは、物理現象が一切予測できないという意味ではなく、ロケットの軌道のように高精度で予測できる現象もある。しかし、世界のすべてを計算として記述できたとしても、あらゆる未来を必ず先取りする普遍的な方法は存在しない。決定論的なブロック宇宙であっても、宇宙の内部にいる私たちには、原理的に予測できない未来が存在する。

それでも、ブロック宇宙では、原理的に予測できない未来も、時空の一部としてすでに存在している。もしそうなら、私たちの思考や選択を含むすべての出来事も、ビッグバンから未来までを含む四次元時空の中に、映画のフィルムの各コマのように、一つの全体としてすでに配置されているだけなのだろうか。

● 創発と知識

ここからは、決定論的なブロック宇宙像を、情報、計算、原理的な予測不可能性と結びつける中で生まれた、私自身の着想について述べる。

宇宙の微視的な物理状態を完全に記述できても、それだけで世界を理解したことになるのだろうか。脳、生態系、経済、社会のような複雑系では、多数の要素の相互作用から、個々の要素にはない性質や規則性が現れる。これが創発である [9]。一つのニューロンの中に理論や愛はない。しかし、多数のニューロンの相互作用と、環境や他者との相互作用を通して、人は思考し、知識を生み出す。この知識も、脳や記録媒体の物理状態に実装された情報である。

一般相対性理論という知識を考えてみる。その理論を構築した当時のアインシュタインの脳を、微視的な物理状態として完全に記述しても、その記述だ

けから「重力を時空の曲率として捉える」という概念の意味が明らかになるわけではない。知識は脳の物理状態に実装されているが、その意味や概念間の関係を捉えるには、より高い記述レベルで、知識を情報のパターンとして扱う必要がある。

また、一つの分子に温度はないが、多数の分子からなる系では、温度や圧力が巨視的変数として創発し、その関係や空間的・時間的变化は熱力学や流体力学によって記述される。同様に、物理状態に実装された知識にも、その構造、生成、変化、相互作用を記述する有効理論があるのではないか。

さらに、新しい知識が創発すれば、それ以前の私たちには定義さえできなかった問いが生まれる。問いが定義されることで、世界がすでに許していた可能性空間のうち、それまで認識できなかった領域が見えるようになる。

● 可能性空間・反事実・選択

ここで可能性空間とは、物理法則が許容する状態や経路の集合をいう。そのうち、私たちが認識し、比較し、探索できる領域は、その時点の知識によって限られている。新しい知識は、可能性空間そのものを無から生み出すのではなく、新しい問いを通してそれまで見えなかった領域を可視化し、その一部を私たちにとって到達可能にする。

知識創造も物理過程である以上、計算としてシミュレートできる [7]。しかし、たとえ正しい答えが存在しても、その計算が有限時間でそこに到達するかどうかを、あらゆる場合について事前に知ることはできない [8]。したがって、私たちの知識には未解決の問いが残り、誤りが含まれる。さらに、ポパーによれば、私たちの知識は仮説的であり、その誤りの発見、批判、修正を通じて更新され、そこから新たな問いが生まれる [10]。

知識は新しい基本力ではない。しかし、物理状態に実装された知識が制御系の一部として利用されるとき、それはその後の物理過程を組織し、制約する巨視的な因果的役割を持ちうる。知識の更新によって、私たちに見える可能性、到達できる状態、制御できる経路は変化する。この意味で、知識は、私たちが探索し、到達できる領域を能動的に切り開く物理的要因の一つとなりうる。

単一の決定論的なブロック宇宙では、反事実として複数の経路を描けても、実在する歴史は一つである。多世界解釈では、宇宙全体の量子状態は決定論的に発展しながら、異なる歴史に実在性を認める[11]。そしてこの多世界的構造は「別のようにもできた」という反事実物理的な表現を与え、自由意志を物理学と両立させるための存在論的基盤となりうる[12]。ただし、多世界解釈では、主体が一つの歴史を選んでそこへ移るとされるわけではなく、分岐後の主体がそれぞれの歴史に存在する。したがって、多世界だけで自由意志が説明されるわけではない。

ここから、次の問いが生じる。反事実として語られる可能性空間内の別の経路は、単なる認識上の構成物なのか、それとも何らかの意味で物理的に実在するのか。知識は、物理世界の一部として因果的な役割を持つのか。知識の創造は、可能性空間のうち、私たちが認識・探索・到達・制御できる領域を拡張する過程として定式化できるのか。そして、多世界的構造が複数の歴史に実在性を与えるなら、その構造の中で主体の選択にどのような物理的意味を与えられるのか。そこに自由意志の物理的基盤を見いだせるのか。これらが、私が現在考えている問いである。

参考文献

- [1] Lees, J. P., et al. (BABAR Collaboration), 2012, Phys. Rev. Lett., 109, 211801.
- [2] Lebowitz, J. L., 1993, Phys. Today, 46, 32-38.
- [3] Minkowski, H., 1909, Jahresber. Dtsch. Math.-Ver., 18, 75-88; Putnam, H., 1967, J. Philos., 64, 240-247.
- [4] Shannon, C. E., 1948, Bell Syst. Tech. J., 27, 379-423, 623-656.
- [5] Deutsch, D., & Marletto, C., 2015, Proc. R. Soc. A, 471, 20140540.
- [6] Landauer, R., 1961, IBM J. Res. Dev., 5, 183-191.
- [7] Deutsch, D., 1985, Proc. R. Soc. Lond. A, 400, 97-117.
- [8] Turing, A. M., 1937, Proc. Lond. Math. Soc., s2-42, 230-265.
- [9] Anderson, P. W., 1972, Science, 177, 393-396.
- [10] Popper, K. R., 1963, Conjectures and Refutations (London: Routledge & Kegan Paul); Popper, K. R., 1972, Objective Knowledge (Oxford: Clarendon Press).
- [11] Everett, H., III, 1957, Rev. Mod. Phys., 29, 454-462.
- [12] Deutsch, D., 1997, The Fabric of Reality (London: Allen Lane), Chap. 13, 338-339.

中山間地域における新たなマネジメントの可能性 —ひと・環境・いとなみから地域の在り方を考える—

関 利 恵 子
(信州大学経済学部教授)

本講演では、人口減少が進む中山間地域を対象として管理会計の視点から新たな地域マネジメントの可能性について検討した。具体的には、研究フィールドである長野県松本市奈川地区を事例としてひと・環境・いとなみという観点から地域を捉え、その理解を踏まえた新たなマネジメントを考察した。

1. 問題意識と「三つの眼差し」

わが国の中山間地域の農業は、耕地面積や農家数では、40%ほどの割合を占めており、それ以外にも水源涵養や土砂災害防止などの多面的で重要な機能を有している。一方で、人口減少や高齢化、担い手不足、獣害などの課題が深刻化し、地域の暮らしや文化を次世代へ継承することが難しくなっている。本講演では、これまで管理会計を主な研究対象としてきた報告者が、なぜ人口 543 人の過疎地域を研究対象とするのかという問いを出発点として、中山間地域が抱える課題だけでなく、その地域固有の価値や可能性に目を向けることの重要性を示した。

本講演で地域を理解するために提示したのが、「三つの眼差し」である。第一は、自然科学の眼差しである。奈川地区は標高約 1,000~1,200 メートルに位置する高冷地であり、稲作には適さない一方、蕎麦栽培に適した自然条件を有している。こうした環境の中で、希少な在来種である奈川在来の蕎麦が守られてきたことは、自然条件と人々の暮らしが密接に結び付いてきたことを示している。

第二は人文科学の眼差しである。奈川地区は、かつて信濃と飛騨を結ぶ野麦街道の中継地として栄え、人や物資が行き交う交通の要所であった。旅人や牛馬をもてなし、身体を温めるための伝統食「とうじそば」は、単なる郷土料理ではなく、人々の交流を支える文化として今日まで受け継がれている。自然環境の中で育まれた暮らしや歴史、人と人とのつながりが、地域のいとなみを形づくってきたのである。

第三は社会科学の眼差しである。自然や文化、日々の暮らしをどのように未来へ継承していくのか。そのためには、多様な主体が地域の将来像を共有し、対話を重ねながら合意形成を進める仕組みが求められる。三つの眼差しは、それぞれ独立したものではなく、互いに重なり合いながら地域の現実を立体的に理解するための視点であり、その重なりの中に持続可能な地域づくりの可能性があることを示した。

2. 地域マネジメントにおける管理会計の応用

本講演では、社会科学の視点から、企業経営で活用されてきた管理会計の考え方を地域マネジメントへ応用する可能性について紹介した。従来、管理会計は企業における利益や効率性を高めるための手法として発展してきた。しかし、人口減少が進む地域社会を会計的な効率性だけで評価すれば、中山間地域は非効率とみなされかねない。近年では、会計情報は単なる計算技術ではなく、人々の対話や合意形成を支える社会的インフラとしても捉えられている。そこで本講演では、管理会計を地域の未来を共に考えるための対話の仕組みとして位置付け直すことを試みている事例を取り上げた。

具体的には、バランス・スコアカード (BSC) を地域版として再構成し、住民・行政・事業者・大学がそれぞれの思いや考えを共有しながら地域の将来像を描くための対話ツールとして活用する可能性を探っている。奈川地域で実施する奈川の未来を考える会では、住民との対話を通して地域の強みや課題を整理し、それらを BSC の戦略マップへと展開することを試みている。戦略マップの作成にあたっては、地域に蓄積されてきた経験や知恵、日々の営みの中で育まれた暗黙知を共有し、それを地域全体の方向性へと結び付けることを目指している。ここで重視しているのは、管理会計手法による評価や管理ではなく、多様な主体が未来を共に考えるための対話のツールとしての役割である。

3. 日台国際共修プログラムの実践と開かれたシステム

地域マネジメントは地域内部だけで完結するものではない。地域内で培われてきた取り組みやつながりを外部へと広げるためには、地域外の主体との対話や協働を組み込んだ仕組みが不可欠である。地域外とのつながりを生み出す実践として、信州大学経済学部で実施した日台国際共修プログラムについて紹介した。この実習では、台湾の大学と信州大学の学生が奈川地区で共同実習を行い、農業体験、小中学校との交流、高齢者への聞

き取り、小水力発電所の見学やグループワークを通して、地域の人びととの対話を重ねながら地域への理解を深めた。これらの実習を通じて示された学生の視点や考え方に住民が触れることは、これまで当たり前と思っていた自然や文化の価値を再認識する契機となり得る。こうした学生と住民との交流は、一時的な交流人口にとどまらず、地域を継続的に支える関係人口の形成にもつながる可能性を持っている。

本講演では、中山間地域を「ひと・環境・いとなみ」という三つの視点から捉える試みを紹介した。こうした視点が、多様な主体による対話や合意形成を支える地域マネジメントの在り方を考える上で、一つの方向性を示し得ることを述べた。講演の中でも触れたように、管理会計は、世界大恐慌やオイルショックなど、極度の資源制約に直面した逆境の時代に発展してきた。この歴史的背景を踏まえると、現在、人口減少が進む中山間地域においてその本質的な価値が発揮されると考えられる。したがって、現在、奈川地区で進めている実践は、その可能性を示す一つの試みであり、中山間地域の持続可能な未来を考える上での新たな視点を提供すると考えられる。

参考文献

- Kaplan, R. & D. Norton (2004) Strategy Maps: Converting Intangible Assets into Tangible Outcomes, Harvard Business School Publishing (櫻井通晴・伊藤和憲・長谷川恵一他訳 (2005)『戦略マップ』ランダムハウス講談社)
- Rosenthal, C. (2018) Accounting for Slavery: Masters and Management, Harvard University Press (川添節子 (2022)『奴隷会計』みすず書房)
- 坂口真司 (2018)『会計社会学』中央経済社.

仏教から見た人間の現存在と社会

吉 水 千 鶴 子

(日本学術会議第 25・26 期第一部会員、
筑波大学人文社会系名誉教授、公益財団法人東洋文庫研究員)

自己紹介：私は学習院大学文学部哲学科、東京大学大学院で印度哲学・印度文学を学んだ後、オーストリアのウィーン大学で文献学的手法によるチベット学・仏教学を専攻し、博士号を取得しました。学んだ研究分野はインド学・インド哲学・仏教学・チベット学で、サンスクリット語・チベット語・パーリ語を研究言語として用い、インドからチベットへの仏教思想の伝承、特に 12 世紀前後の伝播過程を現在の研究の中心テーマとしています。近著に『チベット仏教』（岩波新書）があります。

仏教学 (Buddhist Studies) とは？：研究対象地域は南アジア・東南アジア・東アジア・中央アジアに及び、2500 年にわたる歴史を扱います。研究方法に、①写本やテキストといった一次資料の解読（文献学=エビデンス）、②思想史の再構築（歴史）、③時代や地域を超えた普遍的テーマと社会的課題の探究（哲学・倫理学）という三段階があります。普遍的テーマとしては、倫理（不殺生=アヒンサーなど）、哲学（存在論・認識論・論理学など西洋哲学と共通の課題）、宗教（心の平安・救済）、社会（僧侶や教団と社会との関わり）が挙げられ、人類学・社会学など他分野とも連携します。

人文学 (人文科学) とは？：人文学 (人文科学) とは、人間の精神活動が生み出した文化・歴史・言語・文学・哲学・倫理・宗教・芸術を研究対象とし、これに人間の共同体である社会（法律・経済を含む社会科学）を加えたものとされます。人文学・社会科学とセットでいわゆる「文系分野」と言われています。人文学研究者は、研究対象である哲学者・文学者・歴史家・芸術家などの「作者の眼差し (テキスト・作品)」を通して、その人物が属した時代・地域という文脈 (コンテクスト) の中で世界を見ること、その著作を先人がどう解釈してきたかを知ること、そして現代の解釈者としての自身の眼差しを加えた複眼的な視野で自らが属する現実世界を観察し、探究することを行います。その際、他者の眼差しと自分の眼差しを混同しないこと、歴史的・社会的コンテクストを無視しないことが重要になります。そ

して、人間とその思考の個別性と普遍性の両方を探ります。人間の精神活動とその創造物を研究対象とする点で、自然科学とは異なると言えるでしょう。

ブッダの教えから見た人間の現存在 (リアリティ) —Text を通して—：2 千年以上昔に編纂されたブッダの言葉を伝える文献を通して、私たちの存在を考えます。「現存在」という言葉は、哲学者ハイデッガーの Dasein を想起させますが、ここではシンプルにリアルな私たちの存在のあり方を意味して用います。ブッダの出発点は「諸行無常」を見据えることであり、それはすなわち、生老病死という、人は必ず死に、愛する者も財産も失われ、栄えるものも必ず衰えるという真実です。これは古代インドの厳しい環境や身分制度を背景にしつつも、人類共通の変えられない普遍的な真実です。この無常なる世界で人間はなぜ苦しむのか、という問いに対し、すべてのものが失われ移り変わるにもかかわらず、人間には自分と自分の所有物への執着があり、それを助長する社会（他者との比較など）があることが原因として挙げられ、ブッダはその執着から離れるために出家（出家、家庭と社会を離れること）を提案します。出家生活においては、戒律を守り、殺生・盗み・性欲を断つ等の倫理道德の実践、諸行無常を知ること（メメント・モリ）、自分本位の心を変革する瞑想修行、そしてすべての人・生き物への慈悲という他者優先の心を持つことが求められます。

ダンマパダ (62 詩節)、スッタニパータ (805 詩節) からの引用と現代社会：子や財産は本来自分のものではなく、執着の対象はすべて無常であり変滅する性質を持つため、在家にとどまってはならないという教えが説かれます。このスコープで現代社会を見ると、私たちの価値観と大きく異なることがわかります。私たちの現代社会では、自己実現や「自分らしさ」、家族・住居・車・財産・ペットなどを大切にすることに価値が置かれますが、ブッダの教えによればそれらはことごとく否定されます。現代において、欲望・執着こそが社会や経済発展の原動力であることを考えると、仏教は現代の価値観と正反対であり、生存本能そのものを否定しているようにすら見えます。

現代社会における出家者 (当事者の眼差し)：このような私たちの価値観からすると、仏教の考え方はナンセンス、意味がないようにも見えますが、しかし、現代社会においても出家し、家庭も社会も捨てる人はいます。チベット仏教ニンマ派のラルンガル僧院（四川省）で修行する漢人の女性（3 畳ほどの

僧房で最低限の生活をしながら瞑想に打ち込み、「満ち足りた世界」を語る）や、理系大学院卒で IT 技術者として高収入を得ていたが腐敗した社会に嫌気がさし 28 歳で出家した男性（仏教を「幸せへの入り口」と表現）の事例は、当事者の眼差しを知らせてくれると言えるでしょう。彼らの出家は競争・ストレス・不条理・貧困といった社会的背景と密接に関わっており、彼らの生き方をどのように解釈すべきか、単なる現実逃避か、価値の多様性の一つか、それとも本当の幸せなのか、と考えさせられます。

仏教（哲学）から見た社会（世間）—再び Text から（先人の眼差し）—：人間社会は約束事と欲望にもとづいて動く一種の「ヴァーチャル」な世界であり、富・繁栄・快適・幸福の追求、国家・共同体の利益の追求、経済・技術（AI や金融・株・為替など）の発展追求は、すべてその根底により良い生活を求める私たちの欲望があります。そもそも私たちは、言葉と概念によって世界を区分して理解しています。例えば、蕾が消えて花が出現したわけではないのに「花が開く」「蕾が開く」というように変化のたびに主語を変えたり、色は本体と別に存在しないのに「花は赤い」のように本体と性質を分けて表現したりしますが、言葉もすべて約束事で成立しています。しかし、ヴァーチャルな世界であっても（あるからこそ）人は苦しんでいる、という現代的な課題も指摘できるでしょう。これもまた私たちの現存在（リアリティ）に他なりません。

菩薩という理想像：大乘仏教が提供する理想の救済者像に「菩薩」があります。『八千頌般若経』からの引用によれば、菩薩はすべての衆生を母・父・息子・娘のように思い、自分が苦しみから解放されねばならないのと同様にすべての衆生が苦しみから解放されねばならないと考え、たとえ百回切り刻まれようとも衆生に悪心を抱かず、彼らを見捨てないという心を持たねばならないとされます。出家を推進してきた仏教にとって、一方で、社会へのコミットメントは重要な課題であり、苦しみはリアリティ（現存在）そのものであって、その救済を説くことにこそ、仏教の宗教的役割があるのです。

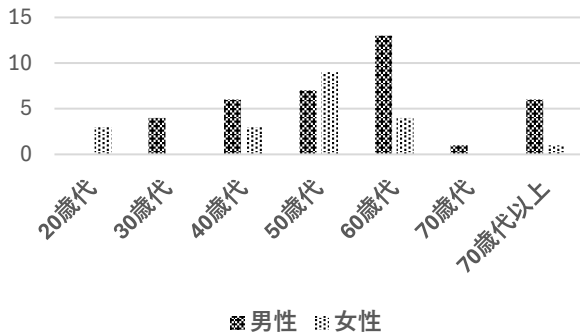
まとめ：仏教は長い歴史を持ち、さまざまな世界への眼差し、世界観を提供してきました。それらを明らかにすることによって、人の思考と営為を知り、私たち自身の現実世界を理解する助けとすることが、人文学の役割の一つだと考えます。

引用文献

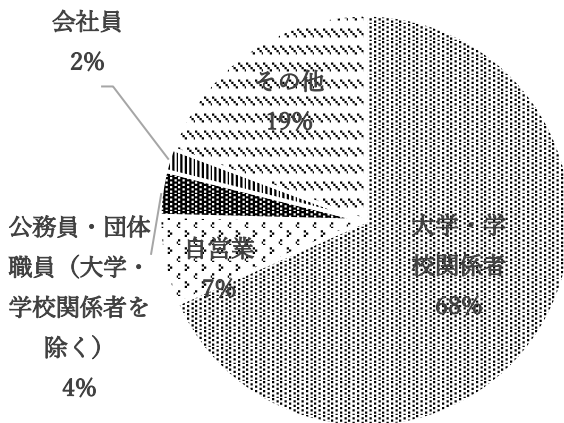
- 中村元（訳）『ブッダのことば—スッタニパーター』岩波文庫 1958
中村元（訳）『ブッダの真理のことば、感興のことば（ダンマパダ、ウダーナヴァルガ）』I 岩波文庫 1978
梶山雄一（訳）『八千頌般若経』大乘仏典 2、中央公論新社 2001

アンケート結果（抜粋）

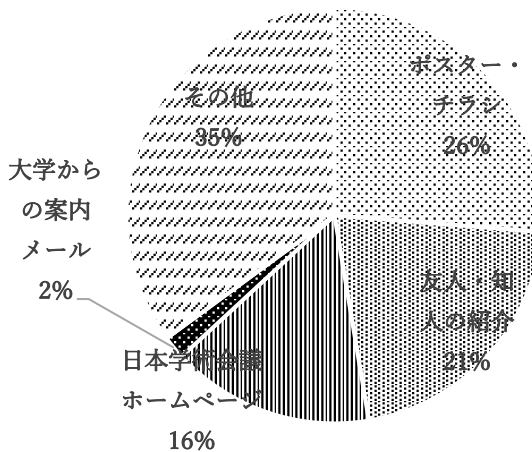
① 年齢・性別



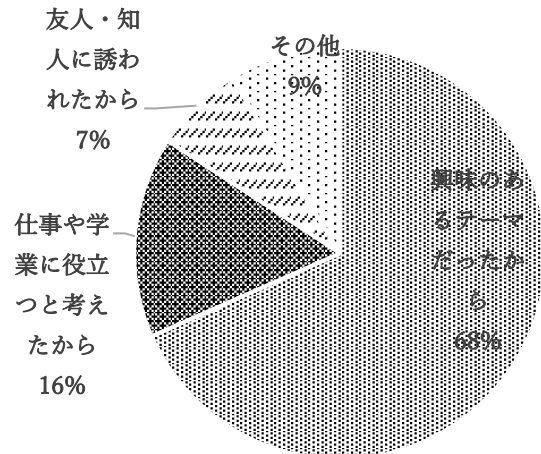
② 職業



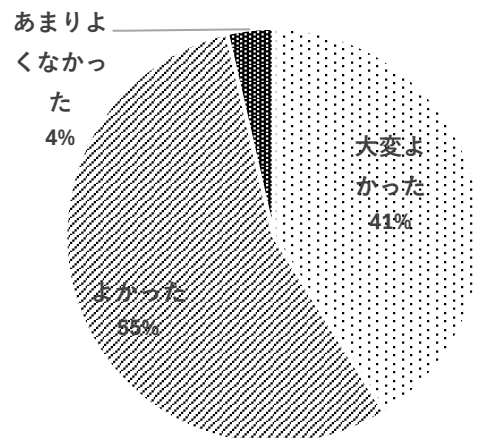
③ どのような方法で知ったか（複数回答）



④ 参加の動機（複数回答可）



⑤ 講演会の内容について



⑥ 意見・感想（抜粋）

自由記述欄には、次のような意見が寄せられました。
（※いただいたご意見を一部編集しています。）

■講演内容について

- ・物理、社会、宗教など異なる分野が人類と地球の未来の幸福について共に議論できることは意義深い。
- ・異なる分野・視点を持つ女性研究者の研究紹介に興味深く拝聴できた。

■今後開催を希望するテーマ、分野について

- ・AI 応用、AI を用いた研究
- ・教育格差と教育システムの再構築

Ⅲ. 日本学術会議会員・連携会員コーナー

熟練作業の自動化に向けたロボット設計 の考え方と、みかん自動収穫への展開 ～「熟練を再現する」から「作業を 簡単にする」へ～

池 浦 良 淳

日本学術会議連携会員
三重大学大学院工学研究科教授

1. 熟練作業の自動化をどう考えるか

製造業、農業、食品加工、建設などの現場には、現在でも人間の経験や感覚に依存する熟練作業が多く残されている。近年は、AI やロボット技術の進歩によって、こうした作業を自動化する可能性が急速に広がっている。

三重大学の人間共生ロボティクス・メカトロニクスリサーチセンターでは、人とロボットが共存する社会を見据え、人間の動作や特性の解析、それに基づくロボット・メカトロニクスシステムの研究を進めており、熟練作業の解析と自動化にも取り組んできた。

熟練作業を自動化する際、一般にはまず、熟練者がどのように作業しているかを調べ、その動作や判断をロボットに再現させる方法が考えられる。熟練者の動作軌道、力の加え方、視線、判断などを計測し、それらをモデル化するか、AI に学習させ、高性能なセンサとロボットによって人間の技能に近い動作を再現する。これは熟練技能を理解する上で重要な研究方法である。しかし、実際の作業をロボットで自動化するという観点では別の課題が現れる。人間は視覚、触覚、力覚、経験などを組み合わせ、状況の変化に柔軟に対応している。その能力をそのままロボットで再現しようとすると、高精度なセンサ、高性能なロボットアーム、高度な制御、大量の学習データなどが必要になり、システムは複雑で高価になりやすい。そこで重要になるのが、熟練者の技能を高度なロボットで再現する前に、「熟練を必要としている作業そのものを簡単にできないか」と考えることである。

2. 洗濯機が示す「作業そのものを変える」発想

この考え方は、洗濯機を例にすると分かりやすい。かつて洗濯は、洗濯板を使って人が衣類をこする作業であった。人は汚れの場所を見つけ、衣類の状態を確認し、適切な力で洗濯板に押し付け、汚れが落ちるまで何度もこする。単純に見え

て、実際には視覚と触覚を使い分ける一種の熟練作業である。もしこの作業を、人間の動作をそのまま模倣する方法で自動化しようとするれば、ロボットに衣類を把持させ、汚れの位置を画像認識し、適切な力で洗濯板に押し付け、布を傷めないようにこすらせる必要がある。柔らかい衣類の形状は常に変化するため、現在の技術を用いても、そのようなロボットシステムの実現は容易ではない。

しかし、実際の洗濯機はそのようには発展しなかった。洗濯機は、人間が洗濯板を使う動作を機械で再現するのではなく、衣類と水、洗剤を洗濯槽の中で動かすという別の方法によって汚れを落とした。つまり「人間の洗濯動作」を再現するのではなく、「汚れを落とす」という本来の目的に立ち返り、その目的を機械に適した方法で実現したのである。その後、すすぎや脱水も機械の中に取り込まれ、さらにセンサや制御技術が加わることで現在の全自動洗濯機へ発展した。この例が示しているのは、自動化の本質は必ずしも人間の熟練動作を忠実に再現することではない、という点である。まず作業方法そのものを変え、機械が扱いやすい問題へ変換する。その上で必要な部分にセンサやAI を導入する。この順序が、複雑な作業を実用的に自動化する上で重要になる。

3. AI に「難しい問題」をすべて解かせない

この考え方はAI を否定するものではない。むしろ、AI を効果的に使うための設計思想と考えることができる。

例えば、対象物の位置に数センチの不確か性がある場合、その誤差をAI や高精度カメラによって数ミリまで縮めようとする、認識システムには、より高度な処理が求められる。一方、ロボットの手先に取り付けたエンドエフェクタが数センチの位置誤差を機械的に吸収できれば、AI にそこまで高い認識精度を要求する必要はない。すなわち、機構によって作業の難しさを減らすことで、認識やロボットの位置決めに要求される精度を緩和でき、その結果としてAI が解かなければならない問題も簡単になる。機械で解ける問題は機械で解き、最後まで残る「見る」「選ぶ」「判断する」といった仕事をAI に任せる。この役割分担が、実用的なロボットシステムを構成する上で重要になる。

4. みかん自動収穫ロボットへの適用

この考え方を実際の研究に適用している例の一つが、三重大学で進められているみかん自動収穫

ロボットの開発である。この研究は、三重大学を代表機関として、農林水産省のスマート農業関連事業の中で推進されている。

みかんの収穫は、人間にとっては日常的な作業であるが、ロボットにとっては難しい。果実は決まった位置に並んでいるわけではなく、葉や枝に隠れている場合も多い。複数の果実が密集して実ることもある。人間は、果実を見つけ、周囲の枝葉を確認し、適切な方向から手を伸ばし、ほかの果実を傷つけないように収穫している。これをロボットにそのまま実行させようとする、果実認識、三次元位置推定、枝葉認識、衝突回避、アームの軌道計画、把持、果実の離脱など、多くの問題を同時に解かなければならない。さらに農地では、工場内で対象物を治具に固定する場合などと異なり、ロボットと対象物の位置関係を一定に保つことが難しい。地面の凹凸、車体の姿勢、カメラの誤差、アームのたわみ、風による果実の揺れなどが重なるため、実際の到達位置には数センチ程度の誤差が生じることを想定する必要がある。

そこで重要になるのが、ロボットアームの先端に取り付けるエンドエフェクタである。エンドエフェクタに、多少位置がずれていても果実を取り込める構造や、位置・姿勢の誤差を機械的に吸収できる機能を持たせれば、ロボットアームに極めて高い位置決め精度を要求する必要性がなくなる。ロボットアームは「果実の中心へ正確に到達する装置」ではなく、「エンドエフェクタを果実の近くまで運ぶ装置」と考えることができる。この違いはシステム設計上大きい。エンドエフェクタ側で誤差を吸収できれば、画像認識やアーム制御に要求される精度を緩和できる。AI も、果実の位置を極めて高精度に求めることより、「どこに果実があるか」「どの果実が取りやすいか」といった判断に重点を置くことができる。

ロボットだけでなく、作業環境も設計する

さらに、ロボットだけではなく、みかんの木や園地そのものをロボットが作業しやすい形に整えることも重要である。枝の配置を整理し、果実を見つけやすく、ロボットアームが近づきやすい樹形にする。圃場も、ロボットが移動しやすいように整備する。必要であれば、汎用の産業用ロボットアームを使うのではなく、収穫作業に必要な機能だけを持つ専用ロボットアームを設計する。つまり、ロボット単体を高性能化するのではなく、園地、樹形、ロボットアーム、エンドエフェクタ、認識、AI を一つのシステムとして設計し、収穫という作業全体の難易度を下げるのである。葉や枝に隠れた果実や、複数の果実が密集した状態についても同様である。AI に最初

からすべての果実、枝、葉の三次元構造を完全に理解させるのではなく、まず外側にあって取りやすい果実を選んで収穫する。その後もう一度画像を取得すれば、先ほどまで隠れていた果実が見える可能性がある。「認識—収穫—再認識」を繰り返すことで、一度に解かなければならない問題を小さくできる。ここでも重要なのは、AI の能力を最大限高めることだけではない。AI が解かなければならない問題そのものを簡単にするのである。

5. 熟練を再現するロボットから、熟練を不要にするシステムへ

この考え方は、みかんの収穫だけに限定されるものではない。部品の組立、研磨、バリ取り、食品のハンドリング、物流、建設作業など、人間の器用さや経験に依存しているさまざまな作業に応用できる可能性がある。

熟練者の技能を解析し、それをロボットで再現する研究は今後も重要である。一方、実際にロボットを社会へ導入するという観点では、「なぜこの仕事には熟練が必要なのか」を考え、その原因を取り除くという視点も同じように重要になる。対象物の形を変える、作業環境を整える、工具やエンドエフェクタを工夫する、ロボットの自由度や精度を必要最小限にする。そして機械だけでは解決できない認識や判断に AI を使う。

洗濯の自動化が、洗濯板を操作する熟練者の動きをロボットで再現することによって実現したのではなく、洗濯という作業そのものを機械向けに変えることで実現したように、熟練作業のロボット化にも同じ発想が求められる。

「熟練を再現するロボット」を作るだけではなく、「熟練を必要としない作業システム」を設計する。AI とロボット技術が高度化する現在だからこそ、機械設計、作業設計、環境設計によって問題を可能な限り単純化し、その上で AI の能力を活用するという考え方が重要になる。この考え方は、これまで自動化が困難とされてきた熟練作業について、研究成果を社会で実際に使われるロボットシステムへとつなげる一つの鍵になると考えられる。

IV. 日本学術会議中部地区科学者 懇談会コーナー

日本学術会議第 196 回総会傍聴記

保 柳 康 一

科学者懇談会長野県幹事
信州大学名誉教授

1. 総会概要

第 26 期会員による日本学術会議第 196 回総会が 2026 年 4 月 9 日（木）と 10 日（金）に東京都港区六本木の日本学術会議講堂で開催されました。1 日目は午前 10 時から小野田紀美担当大臣の挨拶に続いてオンライン出席者の確認と承認がなされ、57 名のオンラインによる出席と会場の出席者 154 名と合わせて総会の成立が確認されました。引き続き討論 1 として量子技術の課題と展望、討論 2 として学術を核とした地方活性化、について話題提供と討論が行われました。第 1 日目の午後は外部評価報告、活動報告、法人化に向けた検討状況が報告されました。2 日目は午前中 9 時 30 分から 11 時 30 分が各部会での討論に当てられ、部会毎に主に法人化に向けての討論がなされました。引き続き午後 1 時からの全体会での討論では各部会から持ち寄られた意見も含め法人化後の日本学術会議憲章案についての討議が活発になされました。予定時間の午後 3 時 30 分を若干超過して、第 26 期最後の総会となる 8 月に向けて憲章案の検討を続けることが示され総会は終了しました。

2. 2 つの講演・提言と討論（1 日目午前）

1 つ目として沖縄科学技術大学院大学、国立情報学研究所の根本香絵先生による「量子未来社会の健全な発展に向けた課題と展望」の講演とそれに基づく討論がおこなわれました。20 世紀後半から 21 世紀初頭にかけてコンピューターによる情報処理の発達とインターネットなど情報通信技術の進歩がめざましいことは私自身も実感してきたことです。根本先生はこの高度情報化社会の構築を第一次量子革命と定義し、さらに 21 世紀の現在では第 2 次量子革命が進行しているとしています。第 1 次量子革命は量子的な性質を持った技術により支えられて、例えば光学顕微鏡などの古典技術では今まで見えなかった物が量子的な光をもちいることで計測可能となったように、知り得なかったものを知ることができるようになったとしています。それは、人文・社会科

学、医療・生命科学、理学・工学など全ての学術領域に及び、現在は量子コンピューター、量子通信ネットワーク（量子インターネット）や量子計測などの量子科学技術の発達による第 2 次量子革命に移行しているとしています。ただ、まだ第 2 次量子革命は萌芽的段階にあり、発達段階が多様で広い分野にまたがっており、大規模な技術体系を必要としているにもかかわらず、教育への投資の少なさにより優秀な人材の確保が難しく、さらに広い分野にまたがるため母体となる学会が存在しないなどの問題があることが、講演の後の議論も含めて示されました。

2 つ目の討論として、「学術を核とした地方活性化の促進に関する検討委員会」の委員長である福井県立大学の西弘嗣先生から「学術を核とした地方活性化の促進」と題して分析と提言がありました。政策として「地方創生」を 10 年前に開始して以降、一定の好事例は生まれたが、人口減少や東京圏への一極集中の流れを変えるまでには至っていないと分析しています。また、学術会議も様々な提言をおこなって、地方に経済的な効果をもたらす学術推進も行われてきたが、課題の解決はなかなか進んでいない現状があるとしています。さらに、地方を襲った甚大な自然災害が数多く発生し、地方における自然研究が観光資源としてだけではなく防災の観点からも各地域の大学や博物館などが重要な役割を担っていると報告しています。災害に対しては、平常時に研究分野を越えた連携や地域社会との間でリスクコミュニケーションをとって緊急事態への準備と対策をすることが必要としています。そのために、以下の 7 つの提言を行っています。地域に応じた学術研究の認識と地域との連携強化、中・長期的な視点と実行体制の確立、地方創生を支える人材育成の強化、経済活動に直結しない研究の重要性、地域に応じたデジタル技術の進め方の研究、地域活性学の体系化、日本学術会議における活動の広報強化と人的基盤の充実です。昨年の金沢における日本学術会議 in 石川の学術講演会での能登における災害とその後の活動に関する講演や討論のような活動のさらなる充実のために、新しくなる学術会議も提言に基づいて活発な活動を各地域で展開していくことが期待されます。

3. 外部評価報告と活動報告（1 日目午後）

第 26 期 2 年目（2024 年 10 月～2025 年 9 月）の活動について、外部有識者対応委員会における学術会議からの説明に基づき、その活動を着実に取り組んできたことが評価されました。

続いて光石衛会長から、2025 年 11 月から 2026 年 4 月までの活動報告がなされました。最初に法人化

の準備状況が報告され、幹事会の下に準備委員会、分科会、WGが2025年8月29日に設置され、12回の会議が開催され検討が進んでいることが報告されました。続いて、26期のアクションプランについて、その1番目に掲げられた「タイムリー、スピーディーな意思の表出と助言機能の強化」について査読プロセスの改革による迅速化・見える化として手続きの合理化と意思の表出の進捗状況の可視化を図ること、また、発出した提言のフォローアップ実施のためのスケジュール管理を徹底することなどが議論されていることが報告されました。特に、災害など緊急時における迅速な意思の表出などが課題となりますが、意思の表出を迅速に進めるための査読体制については議論になりました。ナショナルアカデミーとしての国際的プレゼンスの向上や国民とのコミュニケーションの促進についても様々な活動が報告されました。

三枝信子副会長から組織運営・科学者間の連携について報告がなされました。学術誌のデジタル化などに合わせた協力学術研究団体の規定の見直しなどについての検討も報告されました。地区会議、地方学術会議の開催状況、財務状況の報告がなされました。

磯博康副会長から広報を中心とした活動が報告され、多くの報告、見解、提言が対応する委員会等から発出されていることが報告されました。なお、提言などの発出のプロセスを合理化して迅速化を図るための提案もなされています。日比谷潤子副会長から国際活動について、第1部から第3部までの各部署長報告、若手アカデミー報告がなされました。

4. 法人化に向けた検討状況の報告（第1日目午後、光石会長ほか）

2026年10月1日に発足する法人の日本学術会議についてその会員選考状況が報告されました。現会員の内、29年9月まで任期のある会員105名は法人化後もそのまま会員として留まり、125名が新会員として選考されている状況が説明されました。三部会の態勢は保持されるが、選考は新興・分野横断分野を加えた4セクションに分かれて行われており、本人の意思確認を経て会員予定候補125名を8月上旬までに選ぶことが示されました。また、連携会員についてもその制度も保持し、任期の残る連携会員は意思確認の上引き続き法人化後も就任をお願いし、新連携会員についても期末に選任することとしています。ただし、連携会員の規模については今後検討し、49歳以下の若手についても2割以上にすることを目指すとしています。組織、会長選考、活動など法人化後に引き継がれる事柄が報告されました。ま

た、今後の会員、連携会員選考に当たっての外国籍の方の扱いの検討状況が報告されました。さらに外部資金獲得に関するガイドライン案が提示されました。

5. 日本学術会議憲章案の報告と議論（第1日目午後、第2日目午後）

法人化後の学術会議活動の規範となる日本学術会議憲章は、第1日目の午後に憲章案が提示され、2日目午前中の部会別の会議でその内容について討論して、午後に各部会の討議結果を受けて議論するという長い時間が使われました。案は声明、前文に続き10項目から構成されていますが、第1日目の議論を経て、2日目には修正案が提示されるなど、議論の中でその内容が深まっていく様子を感じることが出来、非常に貴重な時間を過ごせたと感じました。2008年に制定された現行の憲章にはなかった「声明」が総論として示され「前文」の前に置かれました。声明には「日本の科学者の代表機関としての使命と責務」を遵守する決意が示されています。また、前文には学術機関としての独立性、自主性、自立性が謳われており、続く第1項から第10項に組織規定や活動内容が示された非常に分かりやすく、格調高い宣言になっていると感じました。法人化以降も、この憲章に沿って、今まで以上に学術が日本国民や世界の人々の生活と幸福に寄与するよう、日本学術会議の活動が活発になっていくと確信できた2日間でした。

6. おわりに

法人化という新たな状況に対応しながらこれまでの理念をより発展させようとする会員の皆様の熱心な討議を2日間にわたって拝聴させて頂くことが出来たことは、本当によい経験になりました。様々な学術分野の第一線で活躍する研究者の方々が、分野を越えて学術と社会発展のために多くの時間を費やして活動している現場を知る機会が与えられたことに御礼申し上げたいと思います。

最後に全く関係ない話ですが、昨今の宿泊代の高騰はとんでもなく、年度初めに当たる今回は都区内ではビジネスホテル1泊3万円前後という値段でした。その対策として、私は東京での学会参加などでは、立川や町田といった周辺の市に宿を取っています。会場へは特急指定席や快速のグリーン車を利用して混雑を避けています。東京でのホテル探しの参考になればと思い経験を付記させて頂きました。

V. 中部地区科学者懇談会新規会員について

以下の4名の方が新たに科学者懇談会の会員になりました。

氏 名	所 属 学 会	関係部	勤 務 先 等
柿沼 誠 (かきぬま まこと)	日本水産学会 マリンバイオテクノロジー 学会 日本藻類学会 日本応用藻類学会	第二部	三重大学大学院 教授
谷内 通 (たにうち とおる)	日本心理学会 日本動物心理学会 日本教育心理学会 日本基礎心理学会 北陸心理学会	第一部	金沢大学 教授
河崎 洋志 (かわさき ひろし)	日本神経科学学会 日本発生生物学会	第二部	金沢大学 教授
西田 かほる (にしだ かほる)	地方史研究協議会	第一部	静岡文化芸術大学 教授

§ 科学者懇談会会員ご登録事項の変更手続についてご案内 §

登録事項（住所、所属・職名等）に変更がございましたら、日本学術会議中部地区会議事務局までご連絡いただきますようお願いいたします。メールアドレスの登録にもご協力ください。

第26期 日本学術会議中部地区会議

運営協議会委員名簿

(令和5年10月1日～令和8年9月30日)

(令和8年7月10日現在)

関係部	氏 名	勤 務 先
第1部	護 山 真 也	信州大学
	久木田 直 江	(静岡大学名誉教授)
	野 口 晃 弘	南山大学
第2部	大 藪 千 穂	岐阜大学
	高 山 弘太郎	豊橋技術科学大学
	後 藤 英 仁	三重大学
第3部	張 勁	富山大学
	永 井 由佳里	北陸先端科学技術大学院大学
	西 弘 嗣	福井県立大学
	高 田 広 章	名古屋大学
	石 原 一 彰	名古屋大学

科学者懇談会幹事一覧

(令和8年7月10日現在)

富山県	竹 内 章	(富山大学名誉教授)
	高 橋 満 彦	富山大学
石川県	福 森 義 宏	(金沢大学名誉教授)
	松 井 三 枝	(金沢大学名誉教授)
福井県	山 川 修	(福井県立大学名誉教授)
	永 井 二 郎	福井大学
長野県	奥 村 幸 久	信州大学
	保 柳 康 一	(信州大学名誉教授)
岐阜県	仲 澤 和 馬	(岐阜大学名誉教授)
	山 本 公 徳	岐阜大学
静岡県	鈴 木 滋 彦	(静岡県立農林環境専門職大学・元学長)
	塩 尻 信 義	静岡大学
愛知県	松 田 正 久	(愛知教育大学名誉教授、元学長)
	和 田 肇	(名古屋大学名誉教授)
	東 村 博 子	(名古屋大学名誉教授)
三重県	柿 沼 誠	三重大学
	瀬 戸 美奈子	三重大学

日本学術会議中部地区会議学術講演会のお知らせ

令和8年度日本学術会議中部地区会議学術講演会を
下記のとおり開催いたしますので、お知らせいたします。

記

日 時：令和8年12月23日(水) 13時00分～15時25分(予定)
場 所：三重大学

日本学術会議中部地区会議事務局

中部地区会議に関すること
科学者懇談会に関すること

は右記へ

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学研究協力部研究企画課内
TEL (052) 789-2039
FAX (052) 789-2041
E-mail ken-ken@t.mail.nagoya-u.ac.jp

※日本学術会議の活動についてはホームページ URL: <https://www.sc.j.go.jp> をご覧ください。